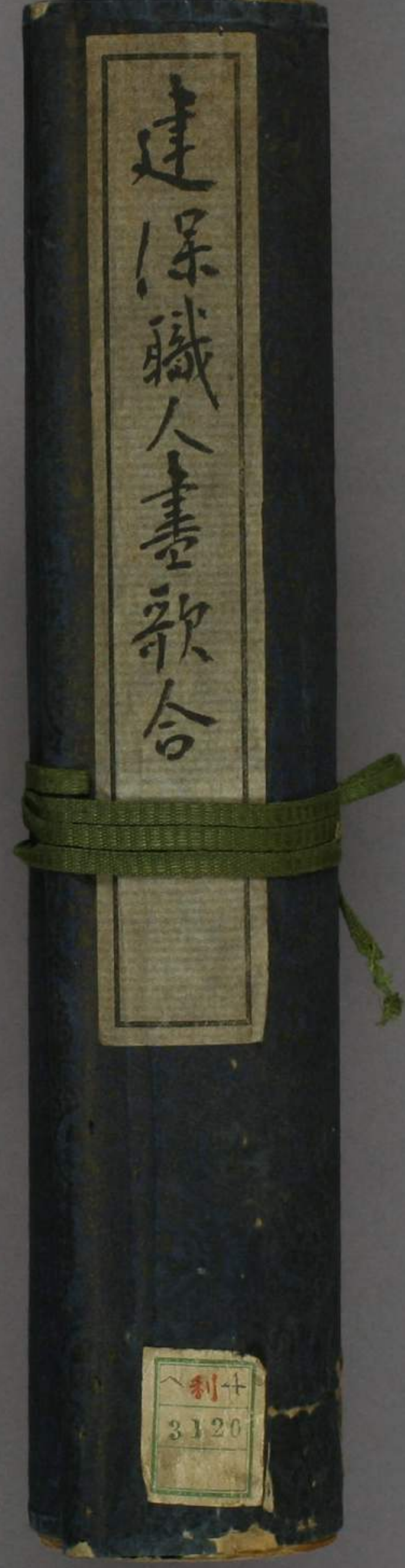
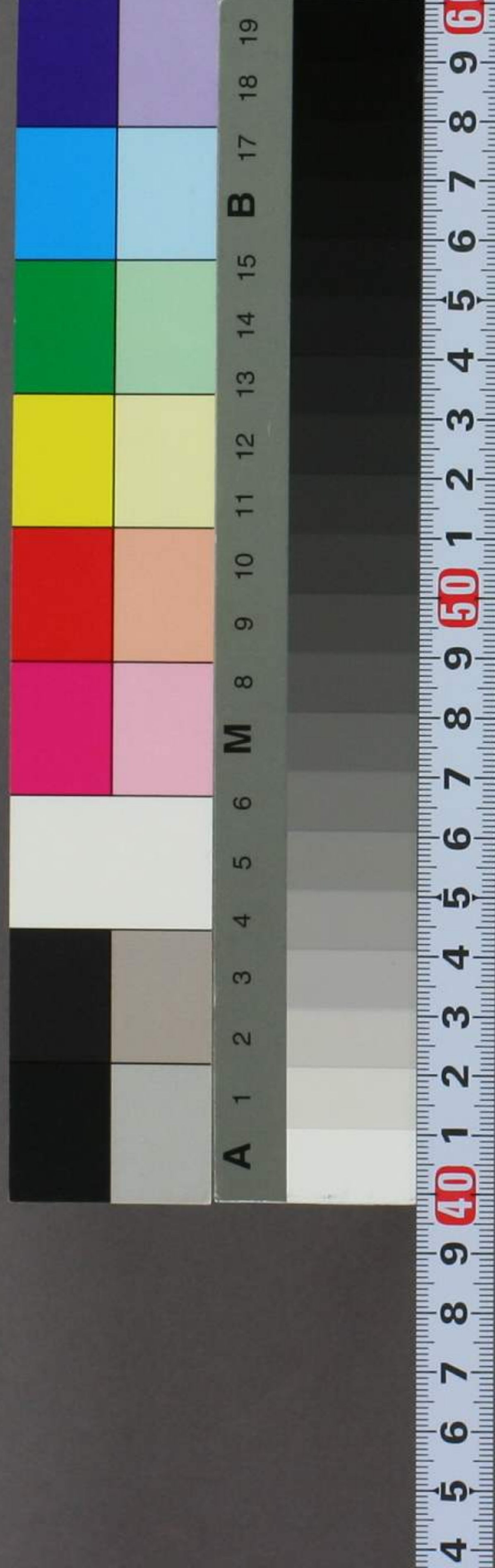
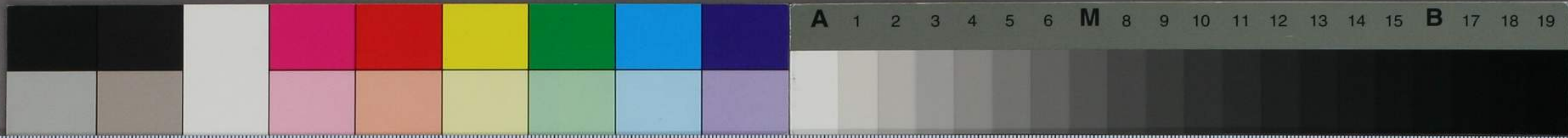




建保職人書歌合

利
3120



建保第三秋のは東山院乃念佛小九重
の久く男女たうきも第もあうり侍
しきりみもこれあとも人あうり
もあうりて聴聞し侍りたり時
九月十三夜の月とまあうりたり
し心り人歌をよみ連なりを
し心りを来侍り侍り遊むと
やもや思ひたり道とれ者あうり
もて遊ひけり月潮と山は端ふ
入あひたりおめをれくそ月
乃名残し我ちもあうり侍り





建保第三秋のは東山院乃念佛小九重
 の人々男女たるきも第もあらず侍
 一りみもこれとて人あはく
 もあつて聴聞し侍りたり時
 九月十三夜の月とまあつたり
 一つり人を歌をよみ連歌を
 して心とあはれしは遊むといふ
 やまもや思ひくむ道とわきまを
 して遊ひけり月影と山は端ふ
 入あむとすおれぬをれくそ月
 乃名残し我もくそあつたり侍
 くて八雲の煙立ちあはれぬ侍
 とも思ひく我も人もあはれを
 何しとて水並れあき世のこころ
 せんともあつたり侍

題

月

恋

作者

左

右

醫師

陰陽師

古今事考略卷之十

題

月

作者

左

醫師 佛師 錫治 刀磨 巫女 深草 緝搔 塗師 樽打 針磨 挂女 商人

戀

右

陰陽師 經師 番道 鑄物師 盲目 壁塗 莖打 松物師 舟人 珠敷司 大愿人 海人



しるべきものなる月のみを

一番
左



一番

左

ひら雲れの移る月のくまに
あふ乃阿〜花あふあふ
君中へ〜心はさるなをさる
あふあふ〜金浪をうた

右

再解や高るれあふ〜月
阿あ〜八雲のくまをさる
思ひ阿あ〜君ふ鬼をさる
あふ〜あふ〜あふ〜

月

たれり〜あふ〜
あふ〜あふ〜あふ〜
あふ〜あふ〜あふ〜
あふ〜あふ〜あふ〜
あふ〜あふ〜あふ〜

恋

あふ〜あふ〜あふ〜
あふ〜あふ〜あふ〜
あふ〜あふ〜あふ〜
あふ〜あふ〜あふ〜
あふ〜あふ〜あふ〜



心刺置みりきり
わらわら月すめ
わらわら月すめ
わらわら月すめ



わらわら月すめ
わらわら月すめ
わらわら月すめ
わらわら月すめ

あふとつとゆゑなる片断れ
あひなをふめとたふそつめ

売るそり 文学 うゝもあさす
 こゝひれ月よあゝうゝもあさす
 思ひあもる 露の夜すゝおあれ
 ととろりあもる人をととろりあ

左歌風情よ路一之侍る但

吾もよくわかれうて
 とうひくやゆくと右月を
 たふきうるさもくおやゆり
 其うさもこれやたふさ海を
 てつえゆり仍も勝

立

方お違ひなり。此もせん事
 あり。佛をゆゑて。後
 罪より。や侍らん。衣欲思は
 里流す。子。お。つ。を。れ。
 ち。や。思。あ。り。き。
 身。や。侍。思。は。り。き。
 う。そ。く。玉。も。れ。と。も。な。つ。編。本。
 あ。う。り。の。証。に。侍。め。た。り。
 い。ま。う。関。不。知。爲。勝。



三番

友

月に鈴の音や人れあへ
つもたそぬちあつちの音
わさちあま一口の味ちよ
思ひをれも 夢にさるる
友

雲うねるをいふもあはれ
いぬく月ふかきまのうら
さるるす

うさぎ
さるる
あはれ
さるる
あはれ
さるる
あはれ

月

たふ洞つてもいふ
てあめうらなり月に鈴
ぬ宿や人のあつちをたふ
こもあつちを陳れりてあ
下にほれうらなりやゆらむ石
ゆき月よりなるあつちを
いそゆき月を歌ふえそい
いそいそ月を惜みあつち

四書
左



墨書

左

我病後低小なる月夜
やうやうさひてゐるん
君のふりひもやうさひ
やうさひてゐるん

右

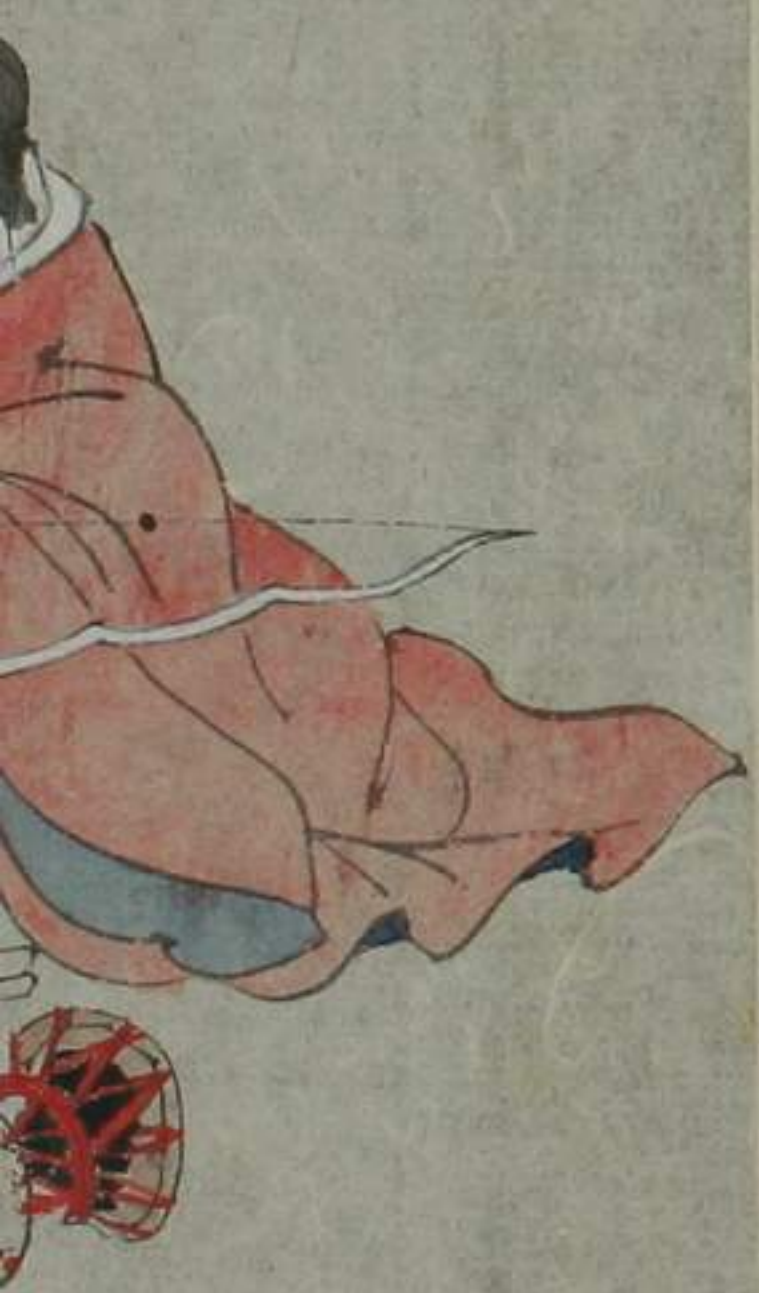
きうきうなる月夜乃
うさひてゐるん
きひれ中ひてゐるん

月

左
お前もなうさひてゐるん
うさひてゐるん
お前もなうさひてゐるん

恋

左
お前もなうさひてゐるん
うさひてゐるん
お前もなうさひてゐるん



左 姑より終へて何なりはしむ事
 多てきくある 右 親はさあ
 りんさきとあさくふ侍り
 右と福勝



五番
 左

五書

友

大さねは月をみる月
とくちの縄をさるる夢
君と我にそよそと花散る
はるも腹もさるる夢

右

さるる月をみる月
ちやうど花散る夢
わくわくする月をみる月
河原の海をみる月

月

大さねは月をみる月
但ちやうど花散る夢
月をみる月をみる月
花散る月をみる月
藤原の海をみる月
さるる月をみる月

大さねは月をみる月
ちやうど花散る夢
月をみる月をみる月
花散る月をみる月
藤原の海をみる月
さるる月をみる月



たねすき
しるし
公儀
眞膳
明
何
為
持



月を白くして光を照らす

光を照らす

人の心

光を照らす
光を照らす
光を照らす

白くして光を照らす

光を照らす

光を照らす

月

右の方を文字に

漢字に六書に

證文に

↑

志

左の方を文字に

光を照らす

光を照らす

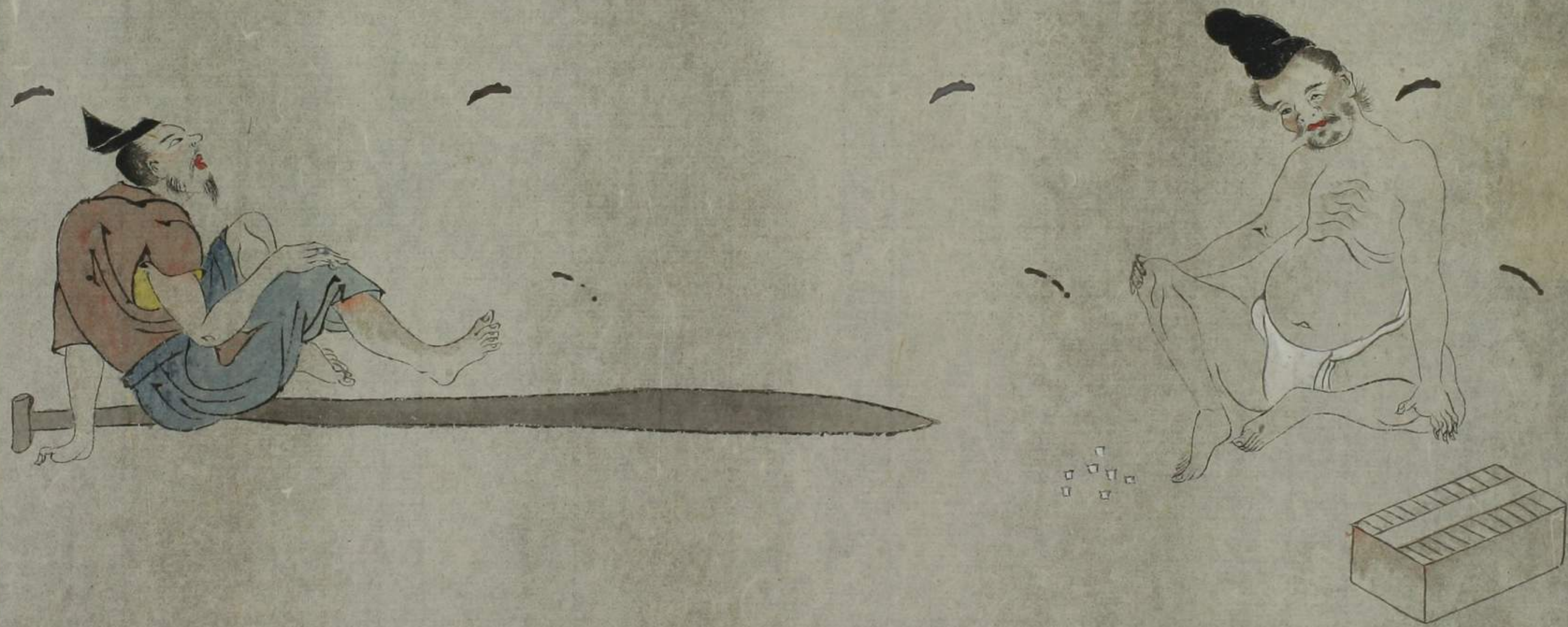
右方を文字早中にて侍りて
漢家平六實れをとおとく
證文をいふるよりその勝る

志

左方乃たるを擧て悉く
わらふもこの中を右のこるを
わらふもこの中を右のこるを
あておのりて侍り侍る



九番
左





九番

友

ねんつらふにせられん地をきて月夜
雲を衣にぬきて見ゆらん
わたりてきりひたしてゐるもの
あはれとす海帰ををさるる

右

あはれとす海帰ををさるる
あはれとす海帰ををさるる
あはれとす海帰ををさるる
あはれとす海帰ををさるる

月

あはれとす海帰ををさるる
あはれとす海帰ををさるる
あはれとす海帰ををさるる
あはれとす海帰ををさるる

悪

あはれとす海帰ををさるる
あはれとす海帰ををさるる
あはれとす海帰ををさるる
あはれとす海帰ををさるる



以方為勝



十番

友

うき世をわかれをばさるる
をばさるるにすまふ月夜
をばさるる我をよめぬ人
つとめぬ人れはやうに

右

うき世をわかれをばさるる
をばさるるにすまふ月夜
をばさるる我をよめぬ人
つとめぬ人れはやうに

月

うき世をわかれをばさるる
をばさるるにすまふ月夜
をばさるる我をよめぬ人
つとめぬ人れはやうに

恋

うき世をわかれをばさるる
をばさるるにすまふ月夜
をばさるる我をよめぬ人
つとめぬ人れはやうに

哀
凡彼是時も心の中を勝者毎
く一組たし海とて思入る可
て云ふまゝなりや侍人







七番

左

月とあそび新井嵐のあそびを村に
東の子供

ふとちあそびのむねをうらやま
右

うらやまをうらやまむねをうらやま
あそびのむねをうらやまむねをうらやま

月

七書

右

月をめで秋の嵐の足跡をて材にする

東の下

ふくちふくちのちんちん
た

右

らんとある客はさむかひなくにねぬ夜月にく
あやうく蘭田に花をひのきぬかきくもあやうく
あやうく

T

月

た風情をうへてとるさるされ
うへて文字によつて種々の取
耳もたもつたり右意のさむくはも
たわつて大に子雲うへをうへて
ぬまれぬとてうへんあひひと
て心もさうして種々の心ひ
うへてなり

愛

左古方此と云う
 て誠にひろりて侍り心細くめて
 此姿をきりたてし杉林の風あり
 仙月此雲のうらみ葉蔭の露乃底
 月寛菴の玉をとりて我ひて知雲二
 玉清源ありて有る方れらきぬ
 る心海とこゝ上とあきと無き
 何と一玉清源と云ふて中へ流る
 仍勝やとて

るに海にこゝしめられしを
 何とて一と云ふもいふに
 仍勝



八番
 我中
 我中

八番

左

我やとれあらず一領と云ふもむね

あまのうらな月れはる

露のいぬやう袖の涙

つもやうくもわかれ

右

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

月

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

急

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

おきとれおきとれおきとれおきとれ

十一番



ふと矢の交字とハナツ
と申して傳達仍左様とす

土番

右

うづ川少くも此れ精ひ
ておれ月夜うさぬらん
おむらひて休ぬらん
るるるるるるるるるる

右

すこもほむ山崎は廣り立たり
そあめ月ふゆふゆふゆ
うき月いぬをいふく月をい
てれむきひきもいふくあめ

月

右うづ川ぬるはたつてききき
うづ川ぬるはたつてききき

よるふあて代れ集めを泊川
ちり川ぬるはたつてききき
又精ひ月をいふく月をい
事しききききききききき
ききききききききききき
右乃為勝

恋

右ハ能得れ舞の姿あまあま一
風情あはれすた何とわくあ
かりききききききききき
るるるるるるるるるるる

雲々傳るうへにふひのなまを
 まさしくしるすちうそふふ
 右乃為勝

惠

方々、祇留れ、哥の姿ありあふ、毎一農
 風情あり、何とす、太何となくある
 か、いそぐ、く、飛道をもつて人の
 る、る、那、へ、大原に軍を神は
 ち、ひ、ま、そ、男にたれ、数と何の
 ら、せ、ゆ、め、する、の、侍もや、控れもあえ
 孫もむさひある、よほきある、公のう
 ち、ぎ、は、これ、心、く、侍り、仍在
 膳とあり

十二番
左
おのれは此入る月を捨てて見る



つぎに右の體に於て

意
 ちきよに命とて人と思われざるを
 知りて悉く方へく座し。我も
 くのきき純友別りきなり。井
 うるれくもよき人なるも此れ
 厚く若く人なるも此れ人なるも
 次上代もも見とるはと傳へて
 中ち有るも。そきも。奇に
 凡そ松を合。深夜に友と被た
 ち。も。物。た。す。き。に
 と。力。と。仍右脇付。ん

右建保職人歌合此書画源義方に
少い求めてみたりとて記されはに家
ぬれ歌合の誰れ作といふもよく建
保順徳院元帝宮とある此定家
澄我外子に名をとり人あやうき
親合をも法人と乃ちものゝまゝ
けり合をもともとの後母其衆も
親老々職人より合にもおられも
けり合より中法宗へも月と恋
をもて歌せしめ也職人より年
物よりえんふ既に有れ二京あり
小村水箱の物語り職人より
尚も品をおこしといひ事今も
ひ何れかぬれらるなりを拾得
たとふ得きしとてたゞ

安永三年甲午三月廿七日

伊勢平藏貞丈判